

アメリカ研究資料センターは、平成12年4月1日よりアメリカ太平洋地域研究センターに改組されました。この改組を祝う記念講演会と式典が平成12年7月12日に開催されました。以下の明石康氏の特別寄稿は、氏が当日行った記念講演「21世紀の平和構築とアメリカ太平洋地域の重要性」を基にしたものです。

## 二十一世紀の平和構築とアメリカ太平洋地域の重要性

明 石 康

ご紹介にあずかりました明石でございます。北アメリカと太平洋地域に関する資料を集めるのみならず研究を促進しようという、国立大学としては唯一のアメリカ太平洋地域研究センターが、改組・発足されることを心からお祝いし、その発展を期待したいと思います。

油井先生のご紹介にありましており、この駒場キャンパスは、わたしにとって非常に想い出の深いところです。ちょうど五十年前、東北出身のわたしが、胸をときめかせて大学生活を始めた、また大都会における生活を始めたのがこの場所でした。正門とか時計塔のある第一号校舎とか、幾つかの建物はわたしたちの学んだ頃と同じですし、銀杏並木も昔のままですけれども、その後たくさんの建物が増え、我々の頃の木造のビルは鉄筋コンクリートに姿を変えています。

建物よりも何よりもまず、学生の気風とかキャンパスの雰囲気の変化が何となく感じられます。1950年、自分たちが感じていた知的な乾き、また、イデオロギー的な当時の混迷の中で、世界をもっとよく知り、またその中で日本の位置と役割を確かめようという気持ちが我々にはありました。それと同じような探求心は今もあるかもしれませんが、かなり問題意識に関し、当時と現在では違うのではないかとわたしは想像しています。知識や情報の総量においては恐らく当時とは比べものにならない大きなものが現在の学徒に与えられていると思います。アジア太平洋諸国間の交流や学問的な接触も大変増大しています。コンピューターによるコミュニケーションの時代が到来し、トランスナショナルないしはグローバルな対話は、ご承知の通り瞬時にして可能ですし、またそれは次々と現実化しています。

しかし、我々の国際的な相互の理解とそれに基づく相互信頼が、そういう知識に伴って本当に深まっただろうかと自問しますと、必ずしも答えは明らかではありません。地域への国々に対する我々の洞察も果たして鋭さと正確さを加えたといえるでしょうか。また誤解とか利害の対立が少なくなったと確認できるでしょうか。わたしは恐らく答えはNO、あるいは条件付きのYESくらいにとどまるのではないかと考えています。だからこそこのようなセンターが必要であるという結論になるのでしょうか。

申し上げた通り、わたしは1950年に入学し、51年の秋に教養学科の二期生としてアメリカ分科に編入されました。一期生には本間長世さんのような優秀な人たちが多かったわけです。アメリカ科には学生をしごくことで有名で、「学生と雑巾は絞れば絞るほどよい」(笑)という言葉を残された中屋健一先生がおられましたし、またここにおられる斎藤眞

先生にはアメリカ仕込みの鋭い分析と方法論を教えていただき、目を洗われる新鮮さを感じたことを覚えています。ともすると無味乾燥な法律を法社会学的な見地から捉えて、日本国憲法やアメリカ憲法を興味深く教えてくれたのは鶴飼信成先生でした。またわたしは大学のみならずその外でも、国際文化会館の専務理事をおやりになっていた松本重治さんからジェファソンの政治思想について学びました。キャンパスには日本人の先生のみならずゴードン・ボールス先生がきておられ、現代アメリカと文化人類学を教わりました。わたしはやたらに興味の範囲が広くて、広く浅くの典型でしたが、フランスの哲学や文学については前田陽一先生から、あの機関銃のような早口の講義を受けました。また木村健康先生のイギリス経済学とか、またこれは教養学科の特権でしたが、西洋について学ぶのみならず日本文化についても学び、比較的な視野を身につけることができました。島田謹二先生からは独特の島田節ともいうべき比較文学論を学びました。竹山道雄先生は日本の思想史を教えていました。また総長におなりになった矢内原忠雄先生は国際政治経済論を教えておられ、これがその後の国際関係論の萌芽であったと思います。戦前の日本の植民地主義について悔恨の念を込めて教えていただいたことを覚えています。

また英語についてはコンサイス英和辞典をつくるのに参画された羽柴正市先生やアメリカ大使館の外交官の奥さんであったグラス・フィン夫人が教えていました。この方たちが一生懸命発音を教えてくださったにも関わらず、わたしは今もってRとLの発音の区別ができないというぶざまな状態であり、当時から先生たちを絶望させていました（笑）。貧乏学生でアルバイトに忙しかったものですから、毎週少なくとも原書を一冊は読め、という中屋先生が恐くてしかたがなかったのを覚えています。お陰で原書も日本の本も、斜めに読む力を身につけることができたのではないかと思います。そういうアメリカ科で勉強して、すべてが何となくアメリカ一色になっていくことへの不満とささやかな抵抗もあって、むしろフランス文学とか哲学に惹かれていったことも覚えています。大学だけではなくアテネフランセに通って、大衆文化に対するエリートの教養の魅力に浸りました。東大を含め当時の日本の学園を風靡していたのは、マルクス主義的な世界観でした。ソ連という国がまだ眩しかったのを覚えています。またレッドパージ反対の学生デモが随時行われており、矢内原総長を正門から入れないようにスクラムを組んで、悪いことをしておいた学生の一人がわたしでした（笑）。江口朴郎先生という偉いマルクス主義史観の先生がおられ、決して教条的ではない弾力性をもった帝国主義論を展開していました。先生は謙虚でぼそぼそした口調で豊かな学識を我々に教えようとされました。

先ほど本郷で行われたアメリカの学究を迎えての研究活動の話がございました。これが本郷のキャンパスで毎年開かれました。そうそうたるアメリカの学者が歴史、哲学、政治学、その他の分野で我々を教えてくれ、その方々の態度は今でもよく覚えておりますが、一様に真摯で真面目で丁重でした。そして友好的で明るい態度で我々に接してくれました。この方たちは謝礼を東大に寄付されて、三人の奨学生がそのお金をもらうことになり、本間長世氏とわたしがそのうちの二人であったことを覚えています。そういうアメリカ研究科のカウンターパートとして、学生のレベルでわたしたちもアメリカ史研究学生連盟、Intercollegiate Association for American Studiesをつくり、わたしは、トーマス・ジェファソンについて発表することになりました。とにかく大変生き生きとした学問グループで、多士済々でしたし、いい発表も多かったと思います。我々はアメリカ民主主義の源流とは

なんであるかについていろいろ発見する喜びを感じました。もう一つの副産物は、女子学生の極めて少なかった東大で、こういうグループを作りますと、女子大の学生ともつきあえる機会ができるのでした。

現在の我が国に話を变えますと、我が国は世界が驚くような発展を遂げ、アメリカに次ぐ世界第二の経済大国になっています。平和国家、民主国家を目指し、アメリカと同盟して冷戦時代を生き抜くことができました。アメリカの核の傘の中に入っていますが、非核三原則を守り続け、専守防衛に努めて現在にいたっています。ODAの額は世界一のところにきています。しかし、借款によるインフラ整備を重視している我が国の援助政策が、最貧国の貧困撲滅と無償援助に方向を移そうとしている一部の先進国によって批判を受けていることはご承知の通りです。また、国連分担金と途上国援助が非常に大きいにも関わらず、残念ながら我が国はまだ安保理の常任理事国になっていません。それは早急に実現するものでもないと思います。またバブルが崩壊した後の日本は、「漂流」という言葉がよく示すような状況におかれています。カンフル注射に次ぐカンフル注射を受けて現在にいたっています。中長期的には、少子高齢化時代を迎えます。それに関しては先進国の中で、我が国と、イタリアとドイツ、どういうわけか旧枢軸国が先頭を走っていますが、第二次大戦を戦った罰とも思われます（笑）。

国全体が漠然たる将来不安と自信喪失に陥っています。わたしは先週まで南アジアの小さい国を二カ国歩きましたが、そういうところでさえも「日本が自信を失っている、これはどうしたのか」という不安の声を聞きました。その反面では我が国の援助に対する高い評価と感謝の念を聞かされました。また我が国からの青年協力隊の人たちにも多く会い、途上国の発展と幸福のために汗を流し、現地にとけ込んでいる若い人たちの姿に、明日の日本人がこうであればいいという思いを深くしました。

我が国はもっと元気をだし、そのためにもっと明確な未来像を描くことが必要です。対策としては、わたしは日本社会における女性の活力をもっと引き出すことだと思います。それから高齢社会になっていますが、65歳以上の人たちの八割はまだ元気です。こういう高齢者の活力を引き出すことが大事でありましょう。第三には、必要に応じて、慎重な形で外国人労働者を導入することもそろそろ考えるべきでしょう。そして蛮勇をもって、馴れあいに基づいているこの社会の利権構造を打破し、国際競争力を本格的に身につける必要があります。そのための痛みを伴う作業を厭ってはいけません。ますます我が国は退歩していくのではないのでしょうか。ともすると内にこもり、排他的に、孤立主義的になる雰囲気がありますが、これを是非とも、外向きに変えていかなければなりません。内弁慶になり、虚勢を張り、何に対してもNOというのではなくて、どしどし他流修行に挑む。腕力とか武力で対抗するのではなくて、日本的な感性とか情緒を保ちながらも、もっと知的なたくましさ、きらきらした論理をひっさげ、そういったものを情緒とミックスしながら生きていくことが必要になってきています。

八方美人という言葉は、我が国ではいい響きがありません。しかし、わたしは我が国のこれからの外交は、八方にらみの外交、全方位外交でなくてはいけないと思います。アメリカとの関係は戦後日本の基本的な方針でした。アメリカの行動には時として単独行動、振り子のぶれの激しい面もありますし、国粋主義的な傾向も時としてみられるわけですが、いざという時に頼りになる国としてアメリカ以外にはないこともまた我々は否定

してはいけません。東アジアの変転する国際関係の中で、バランスとしてのアメリカの実力と能力は、二十一世紀においても評価すべきでしょう。それだけではなく、我々が重要だと思う基本的な価値の共有という意味でも、また現代の世界で最もバイタリティーに富んだ国としても、アメリカが存在することを忘れてはいけないと思います。

西ヨーロッパ諸国に関しては、アメリカの陰に隠れた感じもありますが、アメリカ的競争社会が生み出した極端な貧富の差とか、セーフティネットへの無関心さを中和するためにも、また主権国家を越えようとする地域的な結集への壮大な実験に従事しているという点からいっても、我が国は多大な関心を持つべきだと思います。

しかし地政学的にも我々は太平洋の北西部、東アジアの一角に位置している国ですので、アジア大陸との関係、ないしは東南アジア諸国との関係を重視する必要があります。この国とは政治的、経済的、文化的にも切っても切れない関係にあります。東アジアをとってみますと、地域共同体的な要素がヨーロッパなどに比べればまだ萌芽的ですが、これからは色濃くなっていくのではないかと考えられます。経済面でのAPECを始め政治面でのASEAN地域フォーラムに我が国は参加しています。こういった地域的な活動は、国連、世界銀行、IMF、WTOその他の世界的なレベルでの参加と共に、それを補充する意味でも重要であり、そこでの我が国の役割も増大していく必要があります。地域的な協力に向かってコンセンサスの形成を——これはヨーロッパなどを見ると、アジアはかなり遅れている印象を免れないわけですが——じっくり時間をかけてやる。ヨーロッパの場合もご承知の通り二十年以上かかってやっと現在の状況にきているわけで、アジアの場合もっと多様でもっと大きな地域ですから、四十年かかったとしても不思議ではないでしょう。

とにかく方向性を誤らないことが大事です。またこのアジアという地域にローカルなヘゲモニー国家が誕生しないような保障が必要であろうと思います。先月韓国と北朝鮮の首脳会談が行われました。ややユーフォリアがありますが、それを割引してもなおかつ、大変に歴史的な会談でした。アジアという地域にある冷戦の残滓を払拭する観点からも、この首脳会談は歓迎されていることでしょう。日朝の国交樹立がアジェンダに載せられていますが、これについても鋭意粘り強く交渉をこれから進めていく必要があります。このように事態が驚くほど改善されている大きな要因として少なくとも三つあげられます。一つは韓国の金大中大統領の太陽政策です。第二には金正日主席の地位が北朝鮮において比較的安定化していることです。第三の要因としてはウィリアム・ペリー前国防長官が編み出した、所謂「ペリー・プロセス」、つまり抑止と参加、飴と鞭とを程良く適宜にミックスした政策が貢献していると考えます。こうした南北朝鮮のこれから増大していく対話と協力を軸にしながら、我が国と中国とアメリカとロシアの四カ国が支援態勢を構築していくならば、北東アジアに平和と安定が、すぐにはつくられることはないでしょうが、それに向けて前進する要素ができてくることは疑いないでしょう。

アジア太平洋地域とアメリカを中心とする北米を、広い統一的な視野から把握することが大事であること、また政治、外交、安全保障、経済、社会変動、文化その他いろいろな側面を、ばらばらに分析するのではなくて、包括的に捉える必要については、先ほど油井先生からお話があった通りです。そのようなことを、この改組されたセンターが中心になって推進することをわたしは心から希望しています。アジア太平洋地域の構造変動に関する米国の位置と役割に関する総合的研究のレポートを拝見しても、そういう方向性が見られ

ます。こういった知的学問的な作業が、豊富な選択肢を提供することによって現実の政治や外交の上でも重要な役割を果たすことができます。結論的にいえば、アメリカを建設的な形でアジアにひきとめること、中国の増大していく新しい役割を探し求めること、何よりも我が国の十年後、二十年後の国際的な責務を明確にする点で、このセンターの活動がこれから大いに役立つのではないかと期待しています。御静聴ありがとうございました。